

私は岩谷時子作詩『愛の讃歌』が好きである。この歌はエディット・ピアフの原詩からかけ離れているという風評を受けて訳詩ではなく作詩と改められた。原詩と似ていない理由は「音だけ届いて詩が届くのが間に合わなかった」等諸説あるが、私は他の歌に遭遇するたびにこの歌は訳詩でよいのではないかと思う。何故なら言葉の表面を見れば甘い恋の歌に見え、さらに多くの人が甘く歌えばそれに追い風を与えるだろうが、この詩の中に女の愛の覚悟がないとは言い切れないからだ。むしろその本質だけは抽出した言葉でまとまっていると思う。この内面性はきっと男性にはわからないのではないかとさえ思う。私の口から歌詞がこぼれるたびに「ん？」という前とは違った不思議な感情がやってくる。回数を重ねるごとにゆっくりと海の底へ沈むように。

そもそも原詩を要約した表現がほとんど見られない訳詩が多いというのに、人々は何故『愛の讃歌 HYMNE A L'AMOUR』の原詩にこだわるのか。それはエディット・ピアフとマルセル・セルダンの不倫愛が不慮の事故によって永久凍結されたという事情にあるのかもしれない。もともとこの『愛の讃歌』はイヴェット・ジローのために書かれたもので、1949年6月12日にパリで完成し16日にレコーディングが行なわれた。だから甘い歌であっても不思議はない。その作詞時の状況を見れば岩谷時子さんの詩とて責める人は誰もいないだろう。ところがマルセル・セルダンが1949年10月27日に飛行機事故で亡くなったために、ピアフはこの歌を自分で録音することを強く望み、イヴェット・ジローにレコードの発売を延期してもらった。そして1950年5月2日にピアフ自身がレコーディングして、愛の悲劇として人々の心を捉えた。実際イヴェット・ジローが歌う『愛の讃歌』と聴き比べていただければ印象の違いは明らかだろう。そのようなピアフの状況が人々のこの歌への評価を変えてしまったのだろう。この歌がたどった経緯は、あふれんばかりの愛で綴られた二人の書簡集『ピアフ 愛の手紙 あなたのためのあかし』（大野修平訳・平凡社）に小さく書かれている。

さて、これほどまでに心を打つ愛はまさにピアフ自身が歌う『愛の讃歌』に対するイメージである。けれど日本語の訳詩を歌うのはピアフではない。原詩に忠実な訳詩だからといって果たしてそれを聴く多くの日本人の愛の琴線に触れるかというといささか疑問である。元の詩が同じであってもピアフとジローの歌から同じ印象を受けないのに、フランス流表現の直訳詩はどこまで日本にこなされて浸透するだろうか？

たとえば「J'irais décrocher la lune 私は月を取りに行きましょう」は「不可能なことも成し遂げましょう」という意味で、不可能＝月を取りに行くほど大変ということ。

「J'irais voler la fortune 私は大金を盗みましょう」は「不当な手段でも大金を手に入れましょう」という意味で、決して泥棒や強盗ではなく、正々堂々の手段でないこと。この感覚はどこまで実感できるだろうか？こんなことが思い浮かんだのはシャルル・デュモン『Une chanson ひとつの歌』を訳してみたからである。歌詞の中の「C'est une bouteille à la mer（それは海の瓶）」は、海を漂う手紙入り瓶のように「届く当てのない便り」という意味。こう考えるとフランス語の原詩表現を歌手が理解しているとしても、予備知識のない大衆の心にどこまで染みこむのだろうかと考えさせられる。言葉の表現の間には深い溝がある。私はむしろ日本人の心に触れる言葉なのに西洋の音楽にピタッと乗っている岩谷時子版『愛の讃歌』が好きである。(2012.12.30)